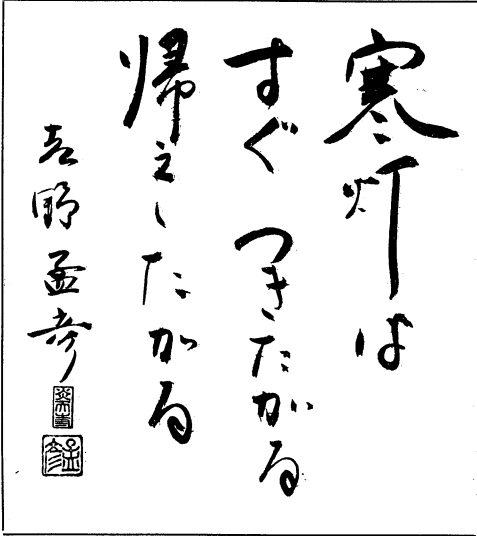


▼ 一茶まつりの行われる炎天寺



「炎天寺の和尚のテレホン法話です。今日のお話は……」と身近な題材で、肩のこらない法話が流れてくるしかけになっている。時々トチル和尚の話が面白いという声も。とにかくアイディア和尚ではある。五十歳の円熟した俳人和尚の次のアイディアは……と今から楽しみです。



▲ 吉野和尚自作俳句の揮毫

しかし、それを避けざるを得ない事情があるに違いない。それをうすうす感じながらも断るより仕方がなかった非力と、無難な道を選んだことの理由に、自分の家族と周囲の安全をふりかざしていることはいやらしさが、どうしてもわだかまるのである。

最近、若い僧が大勢の参拝者たち一人一人に、ひと口説法をするところに居合わせた。「おばあさんはどこから来ましたか」と聞く口調が、テレビやラジオのインタビューのそれと似かよっている。中年紳士などには、丁寧な語りかけをしているのだが、老人や子供には、つい気安さからの口調で、「おじいちゃん、おばあちゃん、坊や」などと呼びかけている。それが、どうも弱い者への心くばりが足りない音韻で響いてくるのである。私がかわってお年寄りや子供への声をかけてみせたのだが、若い彼は、全然気付かなかった。ただ丁寧な口調としか聞こえなかったらしい。

私が、老人の持っている年輪と、子供の持っているまっすぐな素直さを、心から素晴らしいと思うようになったのは、ごく最近のことである。心から素晴らしいと思うからこそ、高い位置から見おろしたような説法も語りかけもできない。逆に、老人や子供から、その素晴らしさを少しでも傾けてほしいと思う。だから、自然と言葉づかいも丁寧になるのである。

そう思うようになったのも、自分の年齢が、人生の半分を越えたことと、「子ども俳句」の仕事を通じて、多くの子供のところに触れているからであろう。

シャブ中毒の電話相談についてのわだかまりも、その人たちのせつなさが身にしみるからであり、また、そのような人たちのつっぱり奥にある、やさしい心に何度か触れたことがあるからでもある。

私の仕事は、強い心と雄々しい心が座標のX軸Y軸になるのではなく、弱い心と美しい心が、それぞれX軸とY軸になるらしい。

学校教育も、多分同じだと思う。

